

国立国語研究所学術情報リポジトリ

海外における日本語学習者の学習環境と学習手段

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小河原, 義朗, 金田, 智子, 笠井, 淳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002148

海外における日本語学習者の学習環境と学習手段

小河原 義朗
(国立国語研究所)

金田 智子
(国立国語研究所)

笠井 淳子
(国立国語研究所)

キーワード

学習環境, リソース, 人, 物, 場 (機会)

要 旨

各教育現場に応じた適切な支援を行うためには、多様化している日本語学習の現状を把握する必要がある。国立国語研究所では、国内外で学ぶ日本語学習者がどのような学習環境・手段で学習しているのかに関する調査を実施している。その結果、日本語環境にはない海外においても、学習者は日本語の授業以外の日常生活において、身の回りにある様々な人・物・場(機会)をリソースとして、日本語と様々な接触をしていることが明らかになった。

1. はじめに

日本語教育は国内外を問わずさらなる広がりを見せている。日本語学習者も、国内では13万人(文化庁 2004)、海外では236万人(国際交流基金 2005)を超えた。それと同時に、日本語学習者の母語や学習目的、分野、各国・地域における日本語の社会的位置づけ、日本語教育機関の設備・環境、教師の教育観や日本語能力など、日本語教育の多様化についての認識は広く定着しつつあり、その多様性に対してそれぞれの教育現場においてそれぞれの対応がなされてきている。

一方、交通手段や情報通信の急速な発展に伴い、これまでのような教室の中での紙と鉛筆による日本語学習だけでなく、短期留学やホームステイなどで直接日本に來たり、インターネットを通じて海外で生の日本語に触れたり、e-Learningによる遠隔学習で学んだりすることが可能になっている。このように地球規模での移動や交流が加速し、様々な情報流通の在り方が変化するのに伴い、日本語を学習する、あるいは教える環境や手段も多様化している。日本語教育の各機関や教育現場は、相互の連携体制を整えながら、学習支援の在り方に対して柔軟に対応していく必要がある。そのためには、まず国内外で日本語を学習している、あるいは教えている人々が、どのような環境・手段で日本語を学習している、あるいは教えているのかについて広く情報を収集し、「多様化」している現状を把握する必要がある。

そこで国立国語研究所では、2000年から国内外の地域(日本、タイ、オーストラリア、韓国、台湾、マレーシア)を対象に、各地域・機関と連携しながら5年計画の大規模調査「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施している。本稿ではその中間報告として、タイ、韓国、台湾、マレーシアでの学習者を対象としたアンケート調査結果の一部を紹介し、日本語環境にはない海外において日本語を学ぶ学習者がどのような学習環境・手段で学習しているの

かについて報告する。

2. 調査の概要

本調査研究の特色は以下の3点である。

(1) 国内と海外の両方を視野においた調査研究である。

社会状況や教育制度、学習環境等が異なる国内外の地域を比較することで、世界の日本語教育の状況全体を把握することができる。国外では、学習者数・学習環境の面での多様性や調査協力体制等の観点から、タイ（バンコック）、オーストラリア（ヴィクトリア州）、韓国、台湾、マレーシアの5地域において、調査を実施または実施中である。日本国内では、全国規模のアンケート調査、及びいくつかの地域におけるインタビュー調査、参与観察等を実施中である。

(2) 微視的・巨視的視野の両面からの研究である。

各国・地域の一般的な教育観、言語教育政策、日本との経済・文化等の交流関係等、それぞれの社会環境の中で日本語教育がどのような位置づけにあるのかという巨視的な視野と、学習者・教師の具体的な行動や意識、教材など、個々の日本語学習・教育の実態といった微視的な視野の両面から調査を行う。

(3) 学習者と教師の両面からアプローチする研究である。

各国・地域の初・中・高等教育機関、民間日本語教育機関、ボランティア教室（国内）などにおける学習者と教師を対象に、アンケートとインタビューを行う。

以下、本稿では、学習者を対象としたアンケート調査結果を中心に、インタビュー調査結果を適宜取り上げて報告する。

学習者が日本語を学習する際には、何らかの物・人・場（機会）といった対象（以下、リソース）に接触すると考えられる。アンケートの内容は、学習者がどのようなリソースにどのような方法で接触しているのかについて質問する項目が中心になっている。また、接触の対象や方法等に影響すると考えられる、日本語学習歴、学習動機、訪日経験等についても質問項目に含めている。インタビューでは、アンケートだけではわからないより具体的なリソースとの接触状況やそれに対する意識等について尋ねた。そのほかに、教育制度や出版状況、インフラ状況等、現地の日本語教育にかかわるマクロレベルの情報についても、文献調査と現地聞き取り調査を実施した。

アンケートでの主な調査項目は以下のとおりである。

【属性】

- ・性別、居住地域、年齢、母語、身分、日本語学習の開始学年、日本語学習の場所、訪日経験、日本語学習動機、4技能別日本語力自己評価等

【質問項目】

- ・日本語の使用状況（相手，頻度，手段，内容，理由等）
- ・日本語との接触状況（物，頻度，内容，理由等）
- ・日本語との接触状況（場，機会等）
- ・授業で使用する日本語教材の授業以外での使用状況
- ・日本語学習のためのリソース
- ・日本語学習のために充実を希望するもの

前述のとおり，対象地域によって学習環境や教育制度自体が異なるため，アンケートでの調査項目や選択肢は一部異なる。アンケートは，各国語版と日本語版のものを用意した。各国調査の実施方法は以下の通りである（詳細については，参考文献に掲げた報告書を参照されたい）。

【タイ調査】

本調査の国外第一調査地域として，タイのバンコック市内（一部その近郊を含む）において日本語教育を実施している機関を対象に，2001年12月にアンケートを実施した。調査にあたっては，国際交流基金の協力を得た。

【韓国調査】

韓国全土を視野に入れ，ソウル，釜山，光州の3地域を核として，2003年3～9月に調査を行った。中等教育機関については各地域の日本語教育研究会，高等教育機関については日本語・日本語教育関連学会，学校教育以外の機関については調査協力機関を通じて，調査協力校の選定，アンケートの配布・回収を行った。

【台湾調査】

台湾全土を視野に入れて調査を行った。財団法人交流協会台北事務所の協力を得て，調査協力校を選定し，2003年12月～2004年2月に調査票の配布・回収を行った。

【マレーシア調査】

マレーシア全土を視野に入れて調査を行った。マレーシア日本語協会の協力を得て，調査協力校を選定し，2004年6～7月に調査票の配布・回収を行った。

本調査では，調査を行った地域の現状把握だけでなく，諸外国との比較検討も視野に入れている。各国の教育制度・学校体系は国によって異なるため，以下の分析では，国際交流基金日本語国際センター(2000)を参考にして，調査対象機関を①～③の三つに分類し，分析対象とした。

- ①「中等教育機関」：日本の中学校及び高等学校に当たる教育機関
- ②「高等教育機関」：日本の大学院・大学・短期大学・高等専門学校に当たる教育機関
- ③「学校教育以外の機関」：民間の日本語教育機関など，上記①②に含まれない機関

本調査の対象となった機関数と学習者数の内訳を次ページの表1に示す。

表1 対象機関数と学習者数の内訳

		中等教育	高等教育	学校教育以外	合計
タイ	機関数	41 (53.2)	33 (42.9)	3 (3.9)	77 (100)
	学習者数	2710 (45.8)	2559 (43.2)	650 (11.0)	5919 (100)
韓国	機関数	45 (47.9)	38 (40.4)	11 (11.7)	94 (100)
	学習者数	3177 (47.1)	2456 (36.4)	1106 (16.4)	6739 (100)
台湾	機関数	35 (31.8)	58 (52.7)	17 (15.5)	110 (100)
	学習者数	926 (26.9)	2075 (60.2)	446 (12.9)	3447 (100)
マレーシア	機関数	40 (44.0)	23 (25.3)	28 (30.8)	91 (100)
	学習者数	2276 (42.5)	2245 (41.9)	839 (15.7)	5360 (100)

(括弧内は%。以下同様)

3. 結果

3.1. 学習者の背景

まず、調査対象となった学習者の背景を表2に示す。女性が多い点は共通している。母語に関しては、マレーシアで多民族国家の特徴が現れている。年齢に関しては、中等教育では10代、高等教育・学校教育以外では20代が最も多い。

表2 学習者の背景

		タイ	韓国	台湾	マレーシア
性別	女性	75.7	62.3	75.4	55.6
	男性	24.3	37.7	23.2	44.0
母語		タイ語 (99.0)	韓国語 (100)	中国語 (91.9) 台湾語 (5.9)	マレー語 (59.3) 中国語 (31.1)
年齢	中等教育	10代 (97.0)	10代 (99.7)	10代 (89.7)	10代 (94.9)
	高等教育	20代 (67.3)	20代 (90.4)	20代 (74.6)	20代 (77.1)
		10代 (30.4)	10代 (5.0)	10代 (17.7)	10代 (21.1)
学校教育以外	20代 (63.8)	20代 (63.9)	20代 (49.1)	20代 (53.3)	
	30代以上 (23.4)	30代以上 (25.0)	30代以上 (46.2)	30代以上 (34.9)	

訪日経験については、次の図1のように共通して少ないが、タイ・マレーシア (9.0%・5.2%) に比べて、韓国・台湾 (24.6%・33.6%) では訪日経験のある学習者が多い。

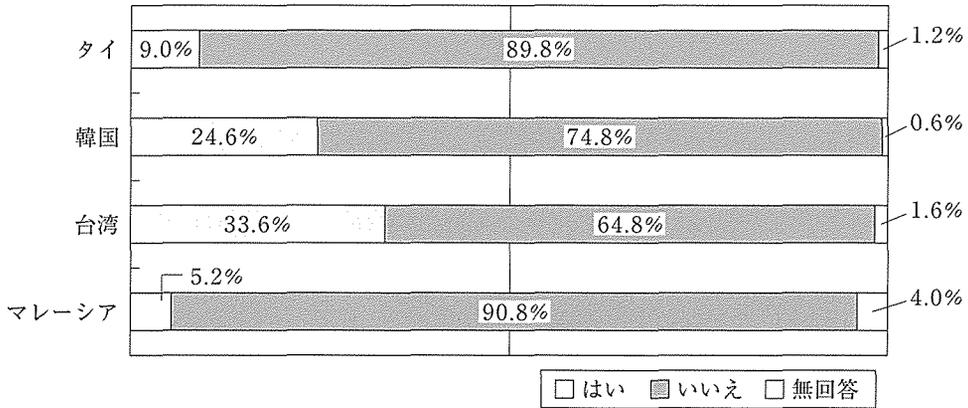


図1 訪日経験の有無

訪日経験のある学習者の訪日目的は、共通して「観光」が最も多い(表3)。日本語学習動機(上位3位までを選択してもらい、その結果を得点化した)は、「日本語に興味があるから」がほぼ共通して高い(表4)。「就職に有利だ」という道具的動機はタイのみで、韓国では「学校の授業にあるから」という消極的な動機が多い。

表3 訪日目的

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1	観光 (63.4)	観光 (64.3)	観光 (87.2)	観光 (39.5)
2	交流 (25.2)	短期留学 (10.2)	親族訪問 (10.6)	国際交流 (19.2)
3	留学 (18.4)	家族滞在 (9.9)	短期留学 (9.4)	企業研修 (12.1)

表4 日本語学習動機

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1	日本語に興味がある	学校の授業にある	日本語に興味がある	日本語に興味がある
2	就職に有利だ	日本語に興味がある	日本のものが好きだ	日本に行きたい
3	日本に行きたい	日本に興味がある	日本に行きたい	日本のものが好きだ

3.2. 人との接触

学習者に対して、日本語の授業以外で、日本語を用いて会話やメールなどを通して人と日本語でやりとりをすることがあるかどうかについて聞いた。図2に示したように、タイでは「はい」(38.0%)「いいえ」(60.0%)、韓国では「はい」(37.3%)「いいえ」(62.1%)、台湾では「はい」(45.3%)「いいえ」(54.6%)、マレーシアでは「はい」(28.1%)「いいえ」(69.8%)と、共通して「いいえ」と答えた学習者の方が多い。

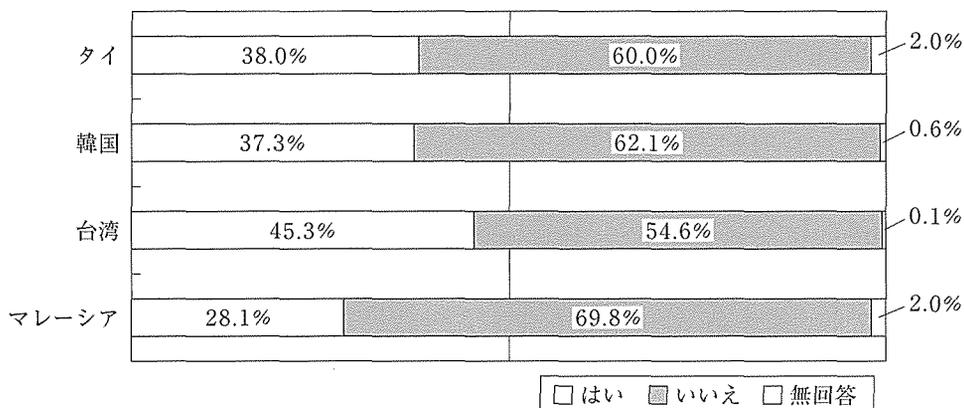


図2 やりとりの有無

しかし、日本語環境にはない海外においても、30～40%の学習者がやりとりをしている。やりとりをしている学習者が授業以外でどのような相手と最もよくやりとりをしているのかについて聞いたところ、表5に示したとおり、順位は異なるが、いずれも「日本語の教師」「学校の友人」「知り合い」で70%以上を占める。日本語の授業終了後に日本語教師と話す、クラスメートと日本語で話す、また訪日中に知り合った日本人とやりとりをすることなどが考えられるが、やりとりの相手や機会は比較的限られていることがわかる。

表5 最もよくやりとりをする相手

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1	日本語の教師 (43.8)	知り合い (25.2)	日本語の教師 (33.3)	日本語の教師 (38.2)
2	学校の友人 (18.3)	日本語の教師 (24.6)	学校の友人 (25.2)	学校の友人 (27.9)
3	知り合い (15.4)	学校の友人 (20.4)	知り合い (13.5)	知り合い (7.3)

一方、やりとりをしない学習者に対してその理由を聞いたところ、表6に示したように、共通して「自分の日本語力が充分ではないから」と「日本語を使う相手がいないから」が多かった。

表6 やりとりをしない理由

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1	日本語を使う相手がいないから／自分の日本語力が充分ではないから (44.0)	自分の日本語力が充分ではないから (44.2)	日本語を使う相手がいないから (49.5)	自分の日本語力が充分ではないから (63.0)
2	日本語を使う相手がいないから (44.0)	日本語を使う相手がいないから (33.0)	自分の日本語力が充分ではないから (33.2)	日本語を使う相手がいないから (14.6)

アンケート調査と並行して行った学習者に対するインタビュー調査でも、やりとりをしない理由として、日本語力の低さや相手がいないことを挙げる学習者がいた。しかし、その一方で、不十分でもなるべく日本語を使ってみようという動機から、教師やクラスメートと話してみる、また日本人の集まる観光地やショッピングセンター、免税店、現地の日本人会等に行って日本人と話しかける、日本食の飲食店でアルバイトをする、知り合った日本人とメールやチャットをするといった方法で、日本人とやりとりをする学習者がいた。このような学習者は、自分自身でやりとりの機会を作り出し、日本語によるやりとりを実現し、さらにはそれによって動機づけや日本語力を高めていると自己評価していた。

このように日本人と日本語でやりとりをする機会は今や海外においても決して特別なものではなく、国や地域を越えて学習者の身の回りに存在している。そしてその機会を自然に、かつ巧みに利用している学習者がいるものと考えられる。

3.3. 物との接触

次に、日本語の授業以外で日本語で書かれた物や日本語が使われている物を見たり聞いたりするかどうかについて聞いた。図3に示したように、タイでは「はい」(76.2%)「いいえ」(20.0%)、韓国では「はい」(76.0%)「いいえ」(21.0%)、台湾では「はい」(77.8%)「いいえ」(20.5%)、マレーシアでは「はい」(63.1%)「いいえ」(35.2%)で、共通して多くの学習者が日常生活の中で何らかの日本語を見聞きしていることがわかる。

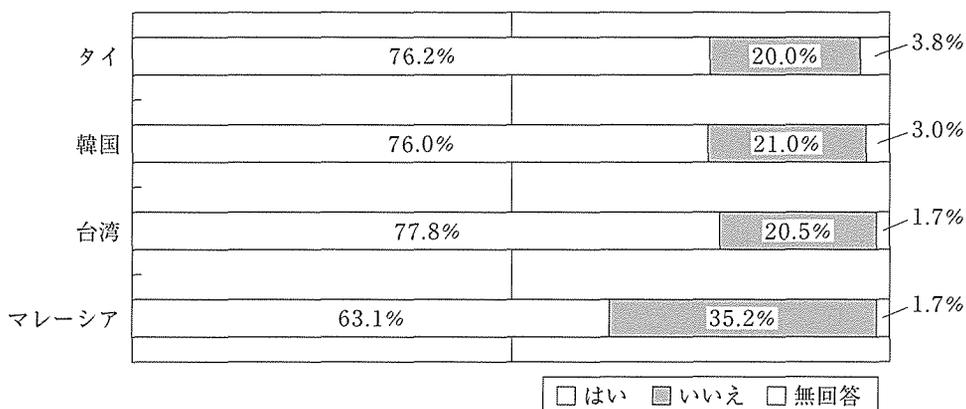


図3 見聞きするものの有無

身の回りにある様々な物の中で、学習者がどのような物を最もよく見聞きしているのかについて聞いたところ、表7に示したように「テレビ」が共通して多く、その他日本の「マンガ」「ゲームソフト」「CD」といった大衆文化の影響が見られる。

表7 最もよく見聞きするもの

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1	テレビ (21.2)	コンピュータ (16.9)	テレビ (41.6)	ビデオ・VCD・DVD (29.6)
2	ゲームソフト (11.6)	テレビ (16.2)	CD (16.0)	テレビ (20.7)
3	マンガ (11.1)	マンガ (15.2)	マンガ・アニメ (12.0)	本 (10.0)

国別に見ると、コンピュータ環境の整備された韓国では「コンピュータ」が最も多い。インターネットによって、日本や日本語関係の物を見たり聞いたりすることが比較的容易にできるためと見られる。日本からのテレビ番組輸出量が世界一であり、26のチャンネルで常時日本製番組を放送している台湾では、「テレビ」の割合が他よりも多くなっている（川竹・杉山・原 2004）。また、中高生や大学生はそれぞれの趣味や好みからゲームやアニメ、マンガといった大衆文化に接触する、また、社会人は勤務している日系企業で日本語の書類やファックスに接触するなど、学習者の動機やニーズによる特徴も見られた。

これらのことから、社会状況や政策、物の価格や流通等の違いから接触できる物の範囲や種類には違いが見られるものの、国や地域を越えて学習者には授業以外の日常生活の中でそれぞれの動機や必要性に応じた様々な物との接触が起こっていることがうかがえる。

一方、学習者が現在日本語の授業で「教材」として使っている日本語教科書等に関して、授業時間外にも何らかの形で利用しているのかについて聞いた。図4に示したように、タイでは「はい」(77.4%)「いいえ」(17.2%)、台湾では「はい」(71.7%)「いいえ」(26.9%)、マレーシアでは「はい」(75.7%)「いいえ」(22.7%)となっており、共通して利用している学習者の方が多かった。韓国では、「学校の授業にあるから」という消極的な学習動機が多い中等教育機関の

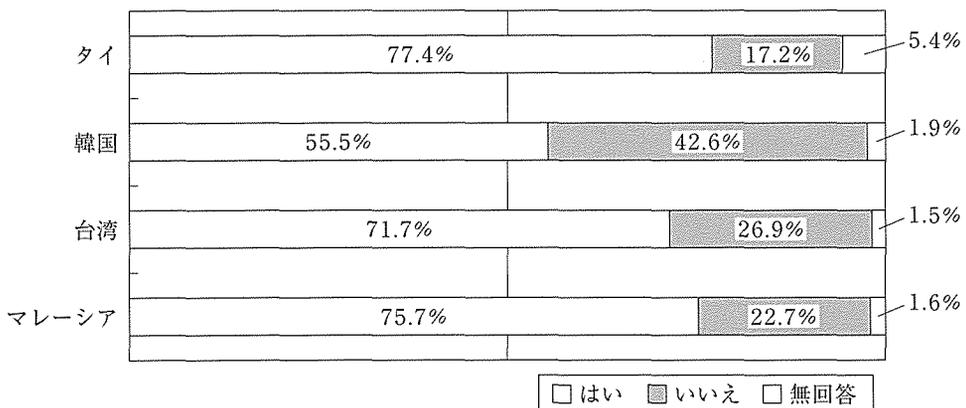


図4 授業時間外の教科書等の使用の有無

学習者の利用が比較的少ないが、全体では「はい」(55.5%)「いいえ」(42.6%)となっており、利用している学習者の方が多かった。

教科書を利用していると答えた学習者にその利用方法について聞いたところ、表8に示したように「暗記・暗唱する」「語句の意味を調べる」が共通して多く、国による違いはあまりみられない。

表8 教科書の利用方法

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1	暗記・暗唱する (68.3)	暗記・暗唱する (54.1)	語句の意味を調べる (79.0)	語句の意味を調べる (77.4)
2	語句の意味を調べる (67.9)	語句の意味を調べる (48.8)	暗記・暗唱する (57.4)	暗記・暗唱する (69.2)

さらに、教科書を利用しない学習者に利用しない理由について聞いたところ、表9に示したように、「どうやって使ったらいいかわからない」「授業以外の時間に日本語の勉強をしない」が共通して多い。このことから、教科書等は授業外でも利用されている一方で、「教科書=授業」といった学習者の教科書等に対する考え方や利用のしかたは非常に固定化されており、限られた利用にとどまっている現状がうかがえる。

表9 授業時間外に教科書を利用しない理由

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1	どうやって使ったらいいかわからない (41.1)	授業以外の時間に日本語の勉強をしない (56.7)	どうやって使ったらいいかわからない (44.7)	授業以外の時間に日本語の勉強をしない (36.2)
2	授業以外の時間に日本語の勉強をしない (30.5)	どうやって使ったらいいかわからない (17.3)	授業以外の時間に日本語の勉強をしない (24.0)	どうやって使ったらいいかわからない (22.8)

また、日本語学習のために現在どのような物を使っているのかについて聞いたところ、表10に示したように、共通して「学習参考書・問題集」(タイでは「文法解説書」)が最も多く、日本語の「テレビ」「歌」といった大衆文化に関する物が続いている。

この点に関して、例えばタイでの学習者に対するインタビューでも、学習者の多くを占める初級レベルでは、タイ人教師のタイ語による文法の授業が多く行われており、会話や聴解といった運用に関する授業が少ない点が指摘されていた。つまり、学習者の日本語学習においては、教室での教科書等による文法学習が大きな位置を占めていると考えられる。

先の表7に示したように、日常生活においてはテレビ等で身の回りに自然に存在する日本語との自由な接触が起きているのだが、それらの接触と日本語の意識的な学習とが結びついていない可能性がある。韓国でも同様に、「学習参考書・問題集」(74.1%)が日本語学習のために最も多

表10 日本語学習のために現在使っている物

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1	文法解説書 (71.9)	学習参考書・問題集 (74.1)	学習参考書・問題集 (79.0)	学習参考書・問題集 (86.8)
2	日本語のテレビ番組・日本の映画／日本語の歌 (30.9)	日本語の歌 (51.2)	日本語のテレビ番組 (71.1)	日本語の映画 (46.8)
3		日本語のマンガ(37.5)	日本語の歌 (69.1)	日本語の歌 (44.1)

く使われている。表7で示したように、インターネット、web、チャット等の「コンピュータ」関係は利用されているにもかかわらず、日本語学習目的のためには使われていない。

しかしながら、表7で示したように、日本語と接触する物として、タイと台湾では「テレビ」が、韓国では「マンガ」が挙げられており、特に台湾では「テレビ」による見聞が多いところを見ると、これらのものが日本語学習と結びついている可能性はある。それらが実際にどのような学習に活用され、日本語の習得に役立っているのかについて具体的に検証していくことによって、日常の中で自然に起こっている日本語との接触と、教科書等による日本語学習とを有機的に関連づけることができるかもしれない。

3.4. 場（機会）との接触

最後に、学習者が授業以外の様々な日本語学習の場（機会）を利用した経験があるかどうかについて聞いた。図5に示したように、利用経験の有無については、タイでは「はい」(44.3%)「いいえ」(47.4%)、韓国では「はい」(42.5%)「いいえ」(53.3%)、台湾では「はい」(39.4%)「いいえ」(58.9%)、マレーシアでは「はい」(28.3%)「いいえ」(68.8%)と、利用は30～40%にとどまっている。

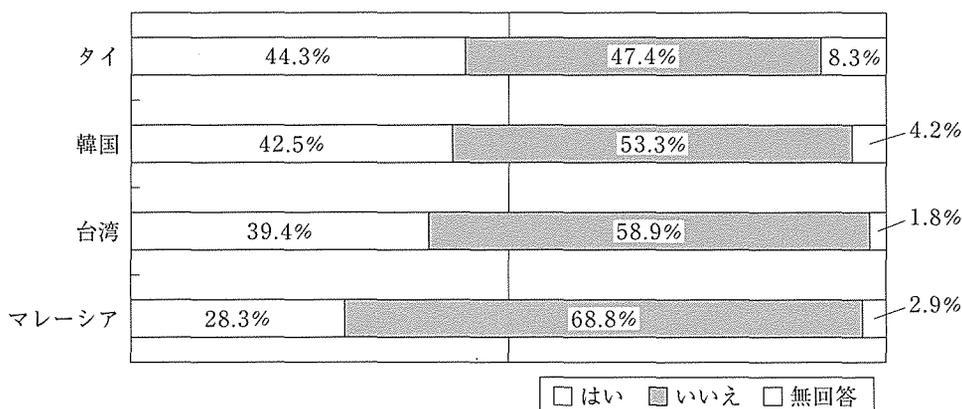


図5 場（機会）の利用経験の有無

利用経験のある場（機会）としては、表11に示したように、日本フェアや日本の伝統文化を紹介するといった「日本・日本語に関するイベント」、「日本人との交流会」、ショッピングセンターや観光地、免税店といった「日本人のいる場所、日本人が集まる場所」が多い。「日本語のカラオケ」は、日本語の曲を含むカラオケボックスが街のいたる所にある台湾の特徴と言える。他の国に比べると日本人との接触機会の少ないマレーシアでは、そのような「日本人のいる場所、日本人が集まる場所」が少ない。

表11 利用経験のある機会や場所

順位	タイ	韓国	台湾	マレーシア
1	日本・日本語に関するイベント (59.5)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (31.3)	日本語のカラオケ (48.0)	日本人との交流会 (50.6)
2	日本人との交流会 (33.8)	日本人との交流会 (27.8)	日本・日本語に関するイベント (36.8)	日本・日本語に関するイベント (36.8)
3	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (32.3)	その他 (23.7)	日本人のいる場所、日本人が集まる場所 (22.2)	日本・日本語に関する資料センター・図書館 (31.2)

タイ調査では、利用経験のない学習者にその理由を聞いているが、①「利用したいと思うが、そのような機会や場所がないから」(71.4%)、②「時間がないから」(34.0%)、③「日本語がわからないと思うから」(30.4%)となっていた。特に利用したいが場（機会）がないという理由が多い点は、学習者に対するインタビューでも同じ結果が得られた。しかし、同じ機関やクラスに所属しながら、例えば国際交流基金の現地図書館や日本語関係書籍が安く手に入る古本屋といった場で実際に日本語に接触している学習者と、そういった情報自体を全くもたない学習者がいた。これらのことから、身の回りに日本語学習に関する機会や場があり、それらの利用を希望しているにもかかわらず、それらについての情報に触れること自体が限られている学習者がいるという現状がうかがえる。

4. 今後に向けて

本調査から、日本語との接触が少ないと予想される海外という環境においても、学習者は日本語の授業以外にも日常生活において、身の回りにある様々な人・物・場（機会）としてのリソースを通じて、日本語と様々な接触をしていることが明らかになった。しかし、そのような接触を量的にも質的にもうまく作り出し、日本語学習に活用している学習者がいる一方で、接触自体ほとんどできていない学習者もいる。また、接触できている学習者の中にも、相手、内容、機会等の点で限られた接触にとどまっている学習者がいるという現状もみえてきた。

このような現状からこれからの支援について提案できることとして、まず、各現場の現状に応じて、学習者の身の回りにある日本語学習のための様々なリソースに関する情報を収集し、学習者を取り巻く学習環境と学習手段に関する実態を把握し、学習者に情報として提供していくこと

が挙げられる。海外という限られた情報の中であっても、意識的・無意識的にかかわらず、リソースとの接触の機会を目的に応じて自ら作り出し、リソースを日本語学習にうまく利用できている学習者がいる。このような学習者がどのようなリソースにどのように接触しているのかを観察し、情報を収集、分析した上で、その方法等を学習者に紹介することによって、リソースとの接触が起きる、新たなリソースへの媒介となる、あるいは学習者の日本語学習への動機づけにつながる可能性がある。リソースとの様々な接触の場や機会を設定・企画することも考えられる。

しかし、単に情報を提供するだけでは、学習者が利用するとは限らない。提供する情報が活用されるためにも、それらが学習者の日本語学習にとってどのような意義や機能があるのかについて、様々な視点から検討する必要がある。実際に、本調査から、学習者は教室外で様々なリソースに楽しく目的に応じて接触しているにもかかわらず、それが日本語教科書や参考書等の利用、また教室内での日本語学習とは有機的に関連づけられていない可能性が見えてきた。学習者の日本語学習を支援する側は、教室内で教科書等を使って日本語を教えるだけではなく、教室外で学習者は日本語学習に影響を与える様々なリソースに接触しているという現状をふまえて、教科書や教室、そして教室活動はそもそもどうあるべきなのかを考え、教室及び学習そのものにとらえ直す必要がある。そうすることで、身の回りにある様々なリソースを有機的に関連付けることができ、教室内と教室外における学習者の様々な学びを結び付けて支援する学習環境を整備することが可能となる。そのためにも、「リソース」が多様性による違いを超えた連携のためのツールとして認識され、活用される可能性が期待されるのである。

今後は、さらに分析を進めると同時に、並行して実施した教師調査、国内調査との比較、検討も進めていく予定である。

参考文献

- 石井恵理子・岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子(2003)「学習リソースの再検討：日本語学習の多様性を読み解くためのフレームワーク作りに向けて」『第2回日本語政策学会研究発表会資料』22-23
- 小河原義朗・笠井淳子・金田智子・石井恵理子(2004)「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—タイ調査報告—」『2004年日本語教育学会国際研究大会予稿集発表1』131-136
- 小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005)「学習者は何をどのように用いて学習しているのか?—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『韓国日本学会第70回学術大会 Proceedings』486-492
- 川竹和夫・杉山明子・原由美子(2004)「日本のテレビ番組の国際性 テレビ番組国際フロー調査結果から」『放送研究と調査 NHK 放送文化研究所 年報2004』48, 213-250, 日本放送出版協会
- 国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2003年—概要』
- 国際交流基金日本語国際センター(2000)『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・1998年—』
- 国立国語研究所(2002)『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—タイ (バンコック) アンケート調査集計結果報告書』(日本語版・タイ語版)
- 国立国語研究所(2004a)『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—韓国アンケート調査

集計結果報告書』（日本語版・韓国語版）
国立国語研究所(2004b)『これからの日本語学習支援を考える—学びを支えるモノ・ヒト・コト—』
平成16年度国立国語研究所公開研究発表会予稿集
国立国語研究所(2005)『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—台湾アンケート調査
集計結果報告書』（日本語版・中国語版）
国立国語研究所（印刷中）『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—マレーシアアン
ケート調査集計結果報告書』（日本語版）
文化庁(2004)『平成15年度国内の日本語教育の概要』文化庁文化部国語課
http://www.bunka.go.jp/laramasi/15_nihongokyoku_gakushuushanituite.html

小河原 義朗（おがわら よしろう）

国立国語研究所日本語教育部門
190-8561 東京都立川市緑町3591-2
ogawara@kokken.go.jp

金田 智子（かねだ ともこ）

国立国語研究所日本語教育部門

笠井 淳子（かさい じゅんこ）

国立国語研究所日本語教育部門